

高度化教養②「利益共有型インターンシップ（地域豊じょう型）」の実施について

－「具体的に何をどうするのか、なぜ大変な労力をかけてもやるのか、どんな意義があるのか」

「2016 利益共有型中長期インターンシップ（地域豊じょう型）」の実績報告書

講義担当 理工学部/COC+推進室 石川 雄一

1. 基本的な考え方

高度化教養②の本講義は、学内で実施する教養教育ではなく、地域（農山村や漁村など）に出向いて行う学外での実践型 PBL である。本講義の他にも高度化教養②には、利益共有型インターンシップ（企業型）と高度化学習ボランティアがある。高度化教養②の3科目全てが Off-Campus 型の地域・企業連携講義として PBL を少人数で行う。図1と表1に2016～2017年度の高度化教養②の共通点と相違点を模式的にまとめている。本講義は、10日～2週間程度の学生と教員が共に宿泊しながら地域と深く触れ合う活動であり、教員は、学生と同じ釜の飯を喰い、同じ湯船につかり、一つ屋根のもとに寝る環境のおかげで、学生の人格や個性を把握しやすくなる。教員は、異なる学部の学生から構成されるチーム活動を学生の肩越しに眺めながらもチームの自主性を尊重して適切に主役の学生を支援しながら導き、地域に「見える化」された成果物作成に向けて学生と一緒に知恵を絞りながら共に活動する。学生は、次の①～⑤の流れを経験する。

- ①地域現場に足を運んで住民との触れ合いからハードな見える地域資源とソフトな見えない地域資源の双方を見いだす行動から、地域の多様な事実 Facts を集める。（今あるものをみつけ、それがなぜかをまず把握する。）
- ②それらを自らの言葉で表現し、分析・構造化して、地域課題とその長所を把握する。
- ③地域の主体性を尊重しながら、地域に利益が生まれるための「根拠がある仮説」を立てる。

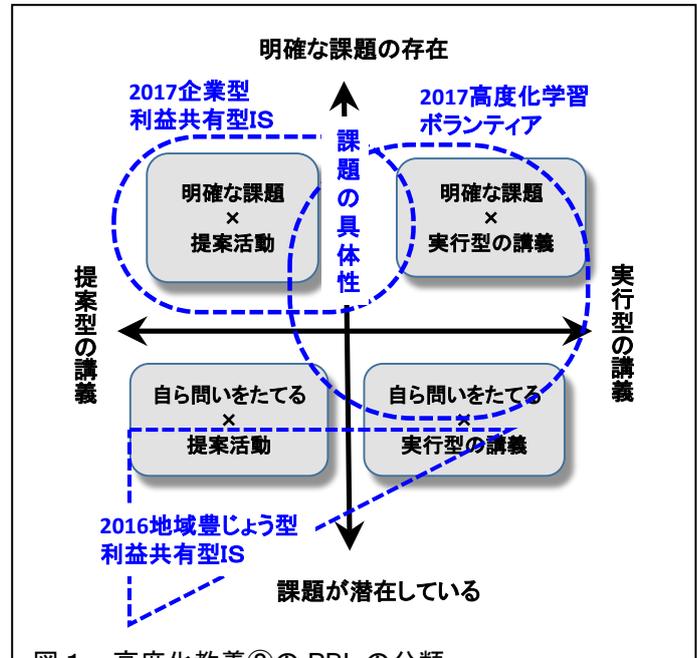


図1. 高度化教養②のPBLの分類。

2016年度の利益共有型インターンシップ地域豊じょう型は下部の三角形で示す領域の活動を行った。2017年度の利益共有型インターンシップ企業型と高度化学習ボランティアは上部の各々、左と右の領域の活動を計画している。連携先の地域や企業の受け入れ時の状況によって上記の点線の枠は変動する。

表1. 3種の利益共有型インターンシップの基本要件

1. 学生同士の協力と連携。
2. 地域、企業、NPO組織との対話と協働。
3. 批判的・論理的思考と感性を育む仕組み。
4. 学生の主体的な成長の場を設定し、評価する。
5. 学生の成長像を明確にして伝える
6. 受け入れ組織への利点と限界点を明示する。
7. 自律的な課題設定、解決策を呈示する仕組み。
8. 危機管理能力を育む経験。

図1と表1は、3種の高度化教養②の相違点と共通点をまとめている。

- ④その案を住民に「見える化」して呈示説明する。
- ⑤学外での活動への準備期間と実施期間中の危機管理（自己と他者の物理的側面と精神的側面の双方）についても学生が実践を積む。

講義を担当する教員は、1. 異質集団（公共圏他者である他学部の学生や地域住民）の中でのやりとりで問いをたて、2. 解決するプロセスにおける推論と仮説の形成、3. 解決に必要な知識の調査分析を通じた創造的、論理的、批判的な思考、4. 地域住民と接し行動する際の「判断」決定、5. 筋道が明確で判りやすい仮説や成果を「言語化する」ことの経験が組み込まれるようにPBLを設計する。さらに、アウトカムとして連携先の地域のために質の高い成果物のみを目指すのではなく、学生の教育効果、例えば、異なる文理融合した学部の学生が、協働作業を通じて同じ成果を目指すプロセス（チームとしての結成期 => 混乱期 => 模範期 => 達成期などの）の経験も積むように講義を意識する。

表2. 高度化教養②の活動において、教員が、学生と地域に開講前のより早い時期に伝えるべき内容

(a)	大学教育として期待する学生の成長は何か。
(b)	受け入れ組織や地域にとっての想定している利点と限界点（期待値）は何か。
(c)	講義が目指している核となる目的と具体的な目標項目（学生、地域、教員の三者の視点）

学生と指導教員が協働して真摯な姿勢で地域と接し、問いをたて、地域に受け入れてもらえる形で見える化した成果物を受け入れ先に示す。このためには、地域住民から「頑張ってますね」の意見しかでないレベルから一歩進んで、「こんな内容では良くない」などの建設的だが否定的な意見が出始めるように教員が取り組み全体を支援することが必要である。当然、学生の成長だけでなく、受け入れ組織側にも我がこととして利益を感じてもらえる活動となるように働きかけることも必要となる。また、学生に加えて連携先の地域にも、上の(a)～(c)を講義開始前に明確に伝え理解してもらうことが必須である。

高度化教養①「地域ブランディング」と高度化教養②2016利益共有型中長期インターンシップ（地域豊じょう型）の最も大きな差は、次の2点である：

- (1) 主な講義活動のほぼ全てが学内でなく学外で地域住民と深く関与したものか否か。
- (2) 地域課題を学生自ら探索するのか、それとも与えられるのか。

課題が地域に潜在している場合、答えが無い（Open End の）問いに対する解決のための筋道を見通すことができないと地域の本質をついた問いをたてることはできない。このため、講義における(2)の問いをたてる過程の有無は学生にとっては極めて大きな教育効果の差となる。

2. 実施した2016利益共有型中長期インターンシップ（地域豊じょう型）活動の概要

大学キャンパス外の過疎地域などの現場において、地域のキーパーソン、鍵となる組織の方々、地域一般住民らとの密なコミュニケーションにより、地域の信頼を得ながら、訪問地域の特徴（良い点と悪い点の双方）を数名の学生チームとして収集する。11人の学生と教員1人が、役割分担で自炊した同じ釜の飯を食べ、同じ湯船につかり、地域の方々との夜なべ談義なども取り入れた8泊14日（5回の訪問）を一つ屋根の下で共に過ごす時間と空間の中で、学生中心の話し合いを深める。訪問先の玖珠八幡の

課題をつかんだ上で、**学生が感じとった八幡地域の魅力を言語化（言葉、絵、模式図、写真など）し、それを都市住民に対して広報紹介するパンフレット（住民にも受け入れてもらえる成果物）として作成することを具体的な目に見える目標とした。**

試作途中のパンフレットの中間評価を地域のキーパーソンから受け、それらコメントを修正し、地域からの最終評価を住民の約4割が参加する地域文化祭において学生による発表をおこなった。数名の地域の評価者からそれに対して不特定多数の住民からループリック評価表による評価をやってもらった。また、これらの活動の中で、学生は、社会人の住民からの聞き取り調査に加えて、全校生徒数35人の地域中学生の数学の問題などを一緒に解いたり、中学生チームと大学生チームとのバレーボール交流を通じて、地域の次の世代層からの情報を得た。情報収集とそれらの分析による得た情報の構造化（ストーリー化）、ならびに、成果物作成の方針とその根拠出しは3～4人チームとして役割を分担し、協働作業で対処した。学生には、チームで仕事を成し遂げる一連の過程「結成期、混乱期、規範期、達成期」における仲間との葛藤や甘えからの脱却とやる覚悟を決めること、さらに、仲間とまとまって同じ目標をやり遂げようとする充実感を体験させたと学生の振り返りシートから確認している。

評価は、成果物発表に対する地域のキーパーソン、住民の方のループリック評価とコメント、指導教員からみたタスクに対する主体性、仲間や地域住民に対する主体性、チーム作業への貢献度を軸に総合的に評価した。

3. 授業のねらい（講義の意義）

地域と学生に呈示したミッション

学生が分析した地域の課題を理解した上で、地域の良い魅力を言語化（言葉、絵、模式図、写真など）し、それを都市住民に対して広報紹介するパンフレット（住民にも受け入れてもらえる成果物）として作成すること。その際、地域のキーパーソンから、忠告や意見を受けながら作成すること。

意義1

未来の地域創生人材を育成するために、学生は、人口減少に悩んでいる農山村・漁村や町などの地域の課題とその資源の原石（ハードな目に見える特産物や構造物などのもの、ソフトな地域の不文律などの文化、コミュニティ活動、人々の気質、組織のまとまりなど）を住民との交流から見だし、その解決策を「見える化」した成果物を言語化して説明することを体験する。この地域創生のプレ体験により、学生は、地域への愛着や誇りといった「ローカル・アイデンティティ」を深めながら、初めての地域に、見ず知らずの年配者と情報のやりとりをすることに一歩踏み込む主体性を高めることもねらいである。

意義2

受け入れ地域にとっても「若者」が過疎地域に集い住民と交流することで、具体的な地域課題の解決策の案が提示されることに加えて、地域住民が気付かなかった地域の特徴を発見する機会が増し、地域の主体性や連帯感が高まり、さらに、これまで接触したことが無かった地域内外の多様な人々との交流場が生まれる。この地域連携教育活動で、学生のコミュニケーション力や一歩踏み出す姿勢が高まることに加え、地域の主体性が増し、地域から大学がこれまで以上に無くてはならない存在として信頼されるようになることが二つ目のねらいである。

4. 具体的な到達目標

- ・現場で得た情報や心が揺さぶられた状況を言語化し、チーム活動を通じて構造化できること。
- ・現場活動により自分自身と社会の課題がつながること — 地域社会に当事者意識を持てること。
- ・見ず知らずの地域住民と交流し、それをチームの協働作業でまとめ発表する挑戦を通じて生み出した目に見える成果とみえない成果を言語化して、相手に伝えることができること。
- ・地域と触れ合う挑戦を通じて得た学びや気づきは何か、さらに、今後の自分の成長の目標を言語化して説明できること。
- ・「地域は何を喜ぶのか」と「自分はどんな想いを届けたかったのか」を言葉で説明すること。
- ・チームとして自発的に危機管理計画を立案し、それを実施できること。

5. 講義の具体的な項目

講義担当者	工学部（現 理工学部）教授 石川 雄一
連携地域と担当者	玖珠町八幡地域、八幡自治会館館長と館員、地域の教育委員、八幡中学校校長 八幡自治会館と大分大学で講義の契約書を交わしている。
実施時期と活動形態	土日と祝祭日、春休み期間、宿泊型で合計 10 日～14 日間の活動 学生と一緒に指導教員も宿泊しチームで活動する。
学生数	最大 10 名、最適 6 名（チームとして効果的に、安全に活動する人数） （実際に参加した学生は、経済学部、教育福祉科学部、工学部の合計 11 人）
チームの編成	活動の前半では、2～3 人一組で地域住民を訪問し情報収集と分析を行う。活動の後半では、地域の教育担当、歴史担当、農業名人の担当、空き家担当班に別れて活動。講義担当者は、学生の肩越しと一緒に取材や分析活動を支援、補助する。
対象学部	全学部（理系と文系の混合とする） ・看護、医学、福祉系の学生も将来の過疎現場のプレ体験となる ・理系学部の内気な学生もコミュニケーションの鍛錬となる
対象学年	2 年生～4 年（2018 年度以降は、1 年生の後期での受講も可能となるように検討したいが、1 年生では専門知識が不足していること、3 年生では専門科目の履修で教養科目の履修が困難になりやすいことから、2 年生での受講をすすめる。）
受講者の要件	2017 年度以降の実施においては基盤教養科目の 2 科目 4 単位以上を履修していること。さらに、高度化教養科目①「地域ブランディング」科目に合格した（履修している）ことが望ましい。受講申し込み者の面接を実施し、これまでの GPA、出席状況、主体性、志望動機などを総合的に考慮して学生数の絞り込みを行う。
学生の負担経費	各自の食事代、入浴費などは個人負担、宿泊費と交通費については負担なし
食事、掃除	参加者全員で自炊し、掃除する
現地での交通	COC+推進室保有の自転車と徒歩で現場を回る
加入すべき保険	入学時に加入した保険に加えて、参加者自身が地域に対して加害した場合の保険（数百円）を学生支援課で申し込む。
注意事項	「匠」認証のためには、高度化教養①地域ブランディングと一つの高度化教養②の双方の合格が不可欠になる。

6. 授業評価

6-1. 学生の評価におけるルーブリック評価の活用について。

本講義は、教員1人で6人前後（多くても10人ほど）の現場活動、情報分析、成果物作成の補助などを担当する。また、参加学生の本講義に臨む姿勢、成績なども事前に個別面接などを通じて確認し、問題がない学生のみを受講とする。ルーブリック評価表は、評価すべき学生数が多い場合に一定の基準で公平に判断する際に有効である反面、記述された項目のみの評価に限定される欠点がある。また、評価をする者が評価のための情報集めに時間と注意力を奪われてしまい、教員として肝心な地域に貢献する活動や、学生の多面的な教育支援を行うことが制限されてしまう可能性が高まる。このため、利益共有型インターンシップ（地域豊じょう型）では、教員自身はルーブリック型の評価を実施しない。やる気も質も優れた少数数の学生の行動を良く直接観察し、地域の方の評価と、学生自身の言語化した振り返りを総合的に教員が評価する。地域の方が学生の成果物発表に対して評価する場合には、単純化したルーブリック評価表とコメントを利用する。

6-2. 具体的な成績評価の内容及び評価割合の目安

- ① 地域と住民に対する主体性、グループ目標に対する主体性、自己に対する主体性 4割
- ② 収集したデータの構造（ストーリー）化と課題の質（本質をつかんだものか）、成果物が地域の方に良い影響を与えたかどうか（地域の方によるルーブリック評価）。 4割
- ③ 振り返り時の自己の考えの言語化 2割

6-3. 地域の方によるルーブリック評価

本講義の成果物のたたき台（試作段階にある地域を年に紹介するパンフレット案）を、地域自治会館の役員、地域中学校教員、有識者ら10人程度に対して発表し評価やコメントなどを受けた。コメントを基に学生がたたき台を修正し、地域の住民1/4が参加する3月の日曜に実施される地域文化祭において住民の方に成果物の発表を実施した。その際、ルーブリックを用いて71名の住民が学生の取り組みを評価した。地域住民が用いたルーブリック評価表と質問項目を表3にまとめている。

表3. 地域住民が使用したルーブリック評価。 星一つ半(1.5)など記述。満点は星三つ、最低は星ゼロ。

☆☆☆ 3	☆☆ 2	☆ 1
八幡での調査から得た複数の事実を、学生視点でストーリー(構造)化し、地域の社会問題に当事者意識を持って考えている。さらに、地域の短所を意識しながら、その長所を活用することで、 <u>地域内の人も変わろうと実感させ、地域外の人にとっても八幡に行ってみようかと感じさせる内容</u> になっている。	八幡の住民から聞き取った複数の事実を、学生独自の頭の中でその意味を考え、複数の地域の事実の関係をストーリー化し、地域外の人にとっても「八幡に行ってみようか」と感じさせる成果物をつくろうと <u>努力している</u> と判断できる。	地域の住民から聞き取った内容を、学生自身が咀嚼して自分の中で意味付けをしないまま、そのまま単にまとめたものである。 <u>(調べたことを単に伝えているだけである。)</u> 八幡での活動体験を紹介しているだけで、地域の社会問題に学生が取り組もうとすることに役立っていない。

さらに、ルーブリック評価と同時に、下記の二つの質問に対する回答も学生の総合評価に活用した。

最終発表を聞き、ルーブリック評価を行った地域住民への二つの質問。

Q.1 パンフレットは、皆様方の何かを変えましたでしょうか。

大きく変わった ・ 変わった ・ 特に変わらなかった

Q. 2 このパンフレットを福岡天神や東京に置いてもよろしいでしょうか。

是非置いた方がよい ・ 置いてもいい ・ 置かない方がよい

6-4. 学生による振り返り内容

次の二つの目標について言語化するために最終成果発表の半月後、大学内で2時間程度の振り返りを行った。その際に使用した振り返りシートを図3に示している。

- ・ 地域と触れ合う挑戦を通じて得た学びや気づきは何か、さらに、今後の自分の成長の目標を言語化して説明できること。
- ・ 「地域は何を喜ぶのか」と「自分はどんな想いを届けたかったのか」を言葉で説明すること。

振り返りのための質問 - 言語化して共有しよう 2017/4/4 いしかわ 2016 利益共有型インターンシップ(活動地: 八幡地区、2016/11~2017/3/12)

質問1. 昨年の9月に、この科目で何をやろうと思われましたか(目的)

質問2. (個人)八幡での活動で心に残る挑戦したことを次の項目に沿って書いてください。

- ・ 挑戦期間(継続したい方はいつまでか)
- ・ 取り組みの内容(ミッション、眺望ビジョン、対象とする人かもの、商品、サービス)
- ・ 全体の中での自分の役割(取り組みの背景と目的も)
- ・ 挑戦先で自分が生み出した目に見える成果は?簡書きで。
- ・ 挑戦先で自分が生み出した、目には見えないが大事な成果は?
(仲間との連携が深くなったとかなど)

質問3. 八幡での挑戦の経験から得た、自分の中での最も大きな学びや気づきは?
(なぜ気づきなのか、なぜ学びなのか言語化しておこう。)

質問4. その学びや気づきを得たのは、八幡での挑戦の中でどんなタイミングや出来事からですか?状況が第三者にも簡単にわかるエピソードを交えて言語化してください。

質問5. 八幡での挑戦を通じて悔しかったこと、もっとこうすれば良かったことを言葉にしてください。(なぜ悔しい、なぜもっとやりたいと考えているのでしょう)

質問6. 八幡での挑戦の前と後で自分の何が変化したでしょうか?心、考え方、行動特性、地域の眺め方、将来の志向性、仕事観など。

質問7. 八幡での挑戦中に出会った方で「すごい、尊敬する」と思った人に共通する想い、行動特性、考え方はどのようなものでしたか。その方と自分とを比較して何が大きく異なると理解しましたか。

質問8. 仕事は、「顧客×価値=対価(給与)」です。みなさんは、どんな価値を、どんな人に提供するプロになり、社会をどう変えていきたい(実現したい社会は何)ですか?(現時点での大切にしたい自分の価値観を言語化するものです。)

質問9. 今の自分に必要な行動アクションは何ですか?

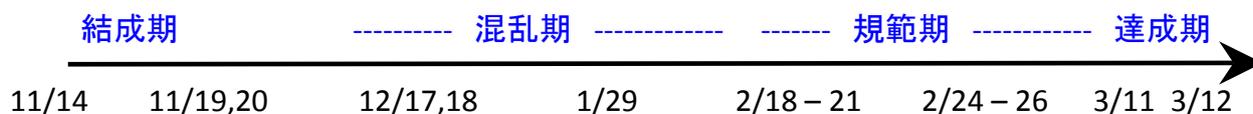


図3. 振り返りシートの内容

7. 講義の展開の基本

7-1. 学期内での講義の流れ

2016年度の活動は、まず、1. 地域住民との交流から入り下記の地域資源を理解する活動を開始した（チーム結成期）。次いで、2. 何を軸として活動を行うのか全員で大変に迷いながら話し合い、学生が「教育、農業の達人、歴史、空き家」の視点で地域の魅力を深掘りすることに決定した（チーム混乱期）。3. どのようにまとめるのか、学生同士、地域住民との夜なべ談議などで協働することで成果のまとめ方を絞り込んだ。最後に、4. 学生がそれらを成果物として「見える化」する協働作業をおこなった。この最後の時期は、一人ひとりが深いエンゲージメント（のめり込んだ忘我）の状態にあり、全員が一つにまとまり、学生同士で鼓舞しながら協働作業を展開する時期となった（チーム達成期）。これらの一連の流れを模式的に図4に示している。この、「理解する、企画する、協働する、見える化する」一連の流れは、どの地域の取り組みでも同様に適用される。

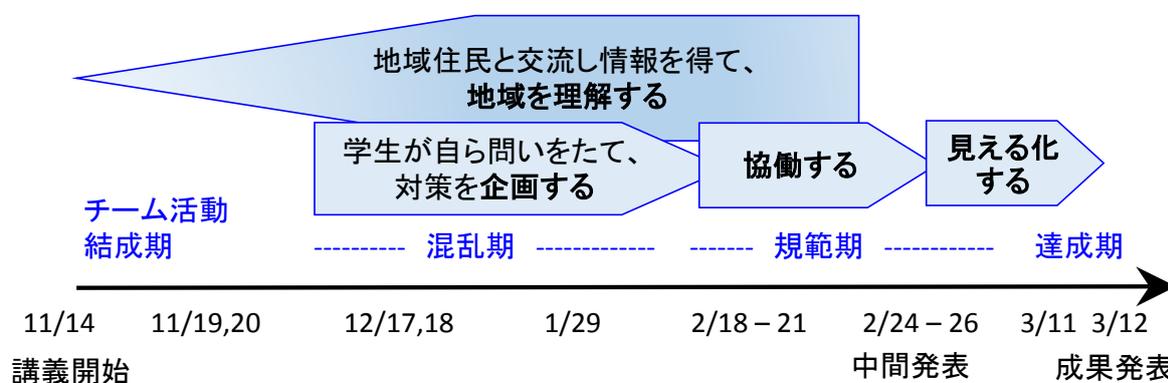


図4. 講義の流れにおける「理解する、企画する、協働する、見える化する」流れとチーム活動の変遷を時系列として表記。地域資源としては下記の群を使用した。

- ①文化資源（工芸、神社、祭り、芸能、歴史）、
- ②自然資源（特産物、山、河川、農地、寒暖差、気温、降雨）
- ③人工資源（施設、道の駅や協働販売所、廃校、道路、自衛隊の存在、営利企業）
- ④社会資源（公民館活動、人のネットワーク、地域の不文律ルール、地域の階層性： 集落、町内会、自治体、行政区、学校区、消防団、民政区域、NPO、社協、子供会など）

表4. 図4の終了が下記の第1段階である場合、本講義を本気で「地域づくり」に展開させる一例。学生の成長目的だけで満足して学期のみの取り組みで地域連携教育を終わせるのか、継続することで本当に地域事業につなげるのか、適切な時期に状況を見極めて決断する必要がある。

	実施目標	取り組みの例
第1段階	地域実態の把握（図4の見える化直後） （「みえる／みえない」地域資源の探索、課題の設定など）	学生と教員の目から見た資源写真地図など
第2段階	地域住民の主体性を深める	住民による「意見地図」や「資源写真地図」
第3段階	事業リーダーの発掘と体制づくり	住民と大学が協働した「アイデア地図」
第4段階	地域の新事業の目的と合意形成	大学と地域との議論展開

7-2. 講義終了後の地域との協働展開

本講義を一学期内の図4の流れだけで終わらせるのか、それとも本講義の「みえる／みえない」成果を本気で地域づくりにつなげるのかを、受け入れ地域も交えて講義終了段階で見極める必要がある。本講義の成果をさらに展開して地域の「ことづくり／ものづくり」事業に展開させる場合に必要な段階的な取り組み案の一例を表4に示している。

「人が変わり、地域が変わり、未来が変わるのです」

(玉沖仁美著、地域をプロデュースする仕事、英司出版(株)、2015年第2版、190ページ)とされている。地域づくりの主役は地域であり、大学や学生ではない。大学と学生は、あくまでも触媒としての関与である。このため、学生が地域に入り刺激を与えた第1段階の次には、住民自身の本気とやる気を高め、傍観からの脱却のための取り組みが第2段階として必要となる。その場合、住民参加型の取り組みを学生と教員が黒子になり実施する。次いで、住民と学生が協働して作業する第3段階を経て、「ものづくりー人づくりーしくみづくり」に取り組む第4段階へと変遷する。この第4段階の「ものづくり」では地域の資源を活かした地域経済を回す活動を行い、「人づくり」は主体的に考えて「ことづくり」活動続けるキーパーソンを育成し、「しくみづくり」は人が入れ替わっても回り続け、成功を持続できるシステムづくりである。

大学が教養の講義として実際に表4のどこまで地域と取り組むことが可能なのか、受け入れ地域とも良く協議して取り組みについて決断する必要がある。この判断の際に、考慮すべき一つの観点を模式的に図5にまとめている。本講義名の一部として利用している「利益共有型」であるためには、学生と地域の双方のやる気、本気が必要なことを描いている。また、異質で多様な能力を持つ人を上手く結びつけ、適切なタイミングで地域の活動のスイッチを入れる人物の存在も重要な因子となろう。

7-3. 2016年度に実施した具体的な活動内容

2016年の11月中旬から月1～2回のペースで宿泊滞在活動を展開し、後期の定期試験終了後の春休みの2月下旬に3泊4日と2泊3日の活動で中間発表と地域からの評価を受け、教務係にはこの時点で成績を提出した。地域への学生の最終発表は、八幡地域の住民の1/4が参加する地域文化祭が2017年3月12日に開催されるため、その文化祭での発表を地域での最終活動とした。少し時間を空け、卒業式をはさんで入学式の前に本講義の振り返りを参加者で共有し、そこで本講義の活動に区切りをつけた。下記の表5は、2016年度後期に玖珠八幡地域で実施した本講義の取り組みの具体的な講義過程を時系列に沿ってまとめている。

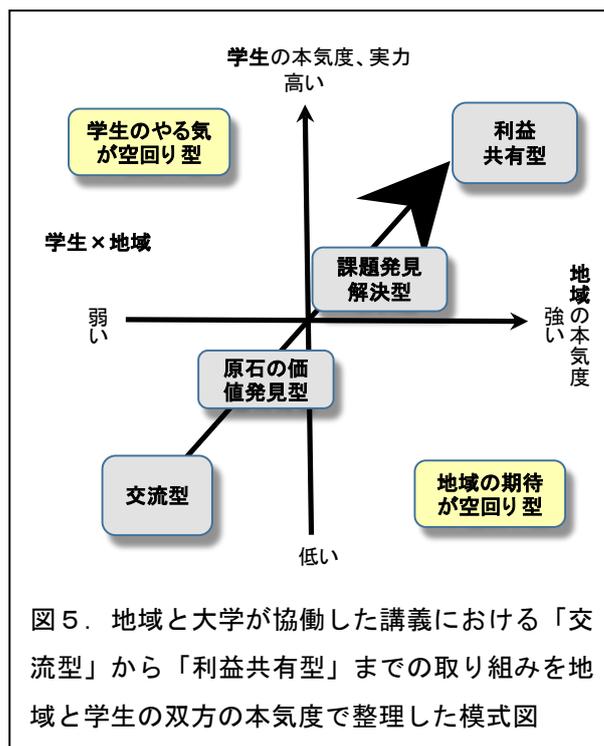


図5. 地域と大学が協働した講義における「交流型」から「利益共有型」までの取り組みを地域と学生の双方の本気度で整理した模式図

表 5. 具体的な講義の過程

日時	実施項目	活動種別	効果と結果
2016/11/14 1回目 大学内でのオリエンテーションと事前学習など	①参加直前の汎用力の自己評価実施（共通シート） ②「玖珠町まち・ひと・しごと創生戦略」統計分析の読み込み ③農業を主な経済とした中山間地の事例をジグソー学習法でグループ学習	事前説明 — 地域理解	①活動前の自分の汎用力を自覚する。 ②玖珠町役場が内閣府に提出した行政が考えている地域の創生計画を理解する。 ③限界集落や、農業を軸とした人口減少地域で活躍されているいくつかのパターンを知る。
11/19～20 2回目 1泊2日	①受け入れの八幡自治会館、地域の教育委員との交流、地域キーパーソンへの挨拶訪問、地域の地理観察、 ②休園幼稚園を宿泊地とした自炊などの協働活動開始。 ③日曜の朝1時間半程度、八幡中学の生徒へ数学などを教える。 ④地域住民宅の個別訪問ヒアリング調査	訪問ヒアリング 中学生との勉強支援による交流 — 地域理解	①地域をリードする人と地域組織などを知る。 ②人口減少の現実を肌感覚で体感する。 ③地域の次世代とその保護者との心の障壁を下げ、スムーズな交流を図る。 ④不安とドキドキ感を乗り越えて井坪踏み込んだ地域活動を開始し、やればできることを体感する。
12/17～18 3回目 1泊2日	①前回訪問で得た情報を基に訪問先を絞り込み、個人宅への訪問聞き取り調査 ②日曜の朝1時間半程度、八幡中学の生徒へ数学などを教えることから次の世代とその保護者との交流を図る。 ③宿泊地に4人のキーパーソンをお呼びして 夜なべ談義 実施 ④大学に戻ってからの振り返りで次の活動で何を調査するか明確にする。	訪問ヒアリング 住民との夜なべ談義 — 地域理解	①と②は上記と同じ。 ③Uターンのお寺のご住職、電気店のご主人、カフェ経営のUターン夫婦、日本一のバラ作り名人の4人と なぜ今ここでやっているのか 、お昼の個別訪問では聞けないリアルな話から、全員の学生が地域の人の「なぜ／どのように」に関する点について触れることができる。 ④地域の長所と同時に問題点のコンセプトマップ作成を課題とすることになる。
2017/1/21～22 1泊2日	大雪で訪問不可のため延期し、日帰り訪問に変更		
1/29 4回目 日帰り	①玖珠の農業者集団、八幡自治会館職員の方とのヒアリング調査 ②大学に戻ってからの何を着地点にして、どのように地域を紹介するパンフレット作成に落とし込んでいくのか議論	住民との宿泊所でのお昼の談議 — 地域理解と企画案の模索を苦悩	①行政ではないが、地域をリードしている活動組織である「八幡自治会館のしくみ」について情報を入手する。また、玖珠町の農業集団から玖珠のアグリ経済について情報を得た。 ②教育歴史文化、空き家活用の移住者促進、全国レベルの農業名人、地域資源地図のデザインに別れて活動することに方針決定。
2/18～21 5回目 3泊4日	①4班に分かれてデータ不足点の訪問調査 ②自治会館役員会議への出席ヒアリングと、地域の創生事業調査対象者との夜なべ談義 ③収集した情報を基にした地域に訴	不足情報の収集 企画モデルを苦しみながら協働	①目標を定めた情報収集ヒアリングにへ展開。 ②地域のリーダー役の議論に参加することで地域課題との距離を縮める。

	求する物語の見える化開始		③学生同士の協働作業が深まる。
2/24～26 6回目 2泊3日	①目標とした地域を都市に紹介するパンフレット案の地域役員の方への中間発表 ②熊本県立大学のPBL学生と情報交換 ③全校生徒35人の八幡中学校の生徒チームと大学生とのバレーボールの試合による交流会。	企画案の地域の方による中間評価 隣県のPBL実施学生との交流会 協働の充実	①三つ星が最高とする評価で「活動は星三つだが、中身は一つ星」と期待を込めて厳しめの評価をされる。これを受けて最終発表へ修正に入る。 ②他学の同様な活動を展開している学生からのアドバイスで学生が鼓舞された。 ③中学校をあげての大学生とのスポーツ交流会となった。
3/11～12 7回目 1泊2日	①3/11までに、八幡自治会館に対し、学生が作成した地域に呈示する最終成果物の案へのコメントと修正を繰り返しお願ひする。 ②文化祭前日の宿泊所で深夜3時前後まで最終発表案の訂正加工と発表練習を全員で自発的に実施する。 ③地域の一般住民も交えた71名から成果物に対してルーブリックとアンケート評価を受ける。	地域の方へ見える化した成果物の呈示	①地域自治会館役員の方々と大学生との精神的な距離が非常に近くなった。 ②学生の八幡地域への愛着が増している。 ③発表に向けた協働作業を「大学に入ってから3年間で最も充実している時間である」と表現する学生がでるほど取り組みに対して深いエンゲージメント状態であった。 ③地域の方も学生の活動により地域を見直すきっかけになっている。
4/4 1コマ 振り返り	6-4節で示した振り返りシートの実施。	体験の言語化	今の自分を認識し、今後の自分に必要なものを言語化して、学生同士が共有できた。



2017/2/19夜、宿泊所の休園幼稚園で学生が4班に別れて、自ら決めたパンフレット案に向けて協働作業をしている状況と、地域課題と長所を整理したグループ分けした付箋上のキーワード。

8. 授業に関するその他の事項